

青年海外協力隊 (ASAFAS) 生駒忠大

本報告書の趣旨

10/17 の渡比から二週間が経った。任地派遣に先立ち、任地訪問を除いた連日マニラの JICA フィリピンでオリエンテーションを受けている。11/3 から 17 日間に及ぶ現地語トレーニングが始まる。

10/24-27 の 3 泊 4 日で任地下見に赴いた。今回の訪問の目的は主に、任地 (Western Visayas 地方 Antique 州 San Remigio 町) での住居探しと受け入れ先 (同町役場農業事務所) とのファーストコンタクト (他部署への挨拶含む) の 2 点であった。その間で明らかになったこと、観察したこと、耳にしたことをフィールドノートを元に文書に興すのが第一号の趣旨である。



職場環境とカウンターパート

サンレミギオは、人口 3 万 2 千人、面積 400 km² の小さな町で、45 のバラングイ (最小の行政単位) を持つ。土地の 70% は植生被覆地で、国内では比較的緑豊かな高原地帯である。配属先である町役場の従業員数はおよそ 100 人、農業事務所のスタッフは男性 3 人、女性 4 人の計 7 人である。直属の上司は同州内一の私立大学で Agricultural Engineering の学位を取得し、同僚のカウンターパートは Agricultural Technologist として勤務している (推定 30 代の男性)。カウンターパート

の出身は南部のミンダナオ島であるが、奥さんの出身地である同町に移り住み、3年前からこの職場で働き始めた。3人の子どもを養っている。

就労時間は 8-17 時である。1 日オフィスに滞在した際には、時折書類に目を通して光景が目に入ったものの特に仕事が進んでいる風もなく、ただ座ったままの人、携帯に触れているだけの人もいた。しかしミリエンダと呼ばれる間食はしっかりとる。スペインの文化であるこの習慣は根強く残っているようで、10:30 頃と 15 時にはスナックやヌードルを各々のデスクでしっかり食べていた。10 畳もない狭い部屋に、ウイルス感染したままのデスクトップが一台、ラップトップが二台、印刷機が一台あるだけ。オフィス内にネット環境がないため、メールの送受信ができない。



町役場の外観

担当するデモファームと期待されている（だろう）こと

訪問中、3 箇所のデモファームを案内された。主に温帯野菜、熱帯野菜、米と栽培作物で 3 箇所を使い分けている。

標高の高いバランガイは、町役場から車で 20 分ほどの場所にある。今年はほとんど使われていない。小学校に併設された畑をデモファームとして利用し、主にレタスやキャベツ、ブロッコリーといった温帯野菜を例年有機栽培しているようだ。隣にはフィリピン国内では珍しいストロベリー農園が法人によって経営されており、フィリピンの高原の北ルソン・バギオを連想させる。

デモファーム周辺地域の農家の話によると、今年は雨季の長期化（または時期のずれ）により、野菜の生育が芳しくないようだ。例年なら 9 月いっぱい終わる雨季だが、今年は訪れた当時 10 月終盤ですら連日降雨があった。例年ならば収穫ができるレタスもほとんど生育していなかった。現地の農家による気候の異常性を懸念する発言は、以前この地を訪れた時も目立っていたことから、かなり気候の変化に意識が向いていると考えられる。



高地のデモファームの外観

標高の比較的低いバランガイにあるもう一つのデモファームは町役場から車で5分程度。この畑は直属の上司が所有しているようだった。主にかぼちゃ、トマト、豆、ナスといった熱帯野菜を試験有機栽培している。ビニルマルチと支柱でしっかり管理されたナスは剪定作業も施されていた。管理人もいるようで、高地のデモファームに比べて行き届いた管理がされている。かぼちゃと大根を収穫した。視覚的感覚では、低地の方が高地の数倍の面積だった。



低地デモファームの外観

この低地のデモファームを訪ねた 26 日は、ナスとトマトに有機殺虫剤としてタマゴヤドリコバチ (*Trichogramma*) の取り付けをした。タマゴヤドリコバチは害虫のタマゴに寄生する。害虫被害はほとんど確認されなかったもので、事後作ではなく被害未然予防のためだろう。上司の発言によると、この *Trichogramma* は野菜作と稲作用で二種類あるらしく、ほぼコストがかからず手に入る。理想的には、8 歩幅間隔で 1 シート設置する。 *Trichogramma* は微量の農薬でも死滅してしまうため、農薬との併用は不可能とのこと。タマゴは熱に弱いので、設置作業は朝夕に行い、雨よけのカバーを同時に取り付ける。一日のうちにタマゴは孵化する。



Trichogramma を設置した様子

米においても、在来品種の試験有機栽培がされている。低地のデモファームから車で2.3分のところにあり、ミミズ堆肥などの有機肥料（詳細不明）を投入し、化学物質の投入はしていないようだが、近代農法で栽培されるハイブリッド品種水田で周辺一帯を囲まれている。上司の話によると、この地域一帯は、伝統農業を営む農家と、有機農業を推進する行政による在来品種の栽培と、IRRIが開発し普及したハイブリッド品種栽培が共存する。同町内には原住民が農業をする地域もあるらしい。標高が高く斜面が多いことや都市部からのアクセスが悪いことから機械化はほとんど進んでいない。除草作業を簡便にするために稲を移植するところもあるが、まだ広く直播が行われている。一部の農家はトラクターを所有し、その貸し借りが行われることもあるらしい。



デモライスファーム

オフィスでは、上司から JICA が強く推進している高倉式コンポストとボカシ作り、また木酢液の作成方法などに関する質問があった。私に見せてきた出所不明のプレゼンテーション資料には、自然農法 (Natural Farming System) についての情報と、比嘉照夫、岡田茂吉、福岡正信の名前もあった。日本で私が予想していた以上に、事務所内においては自然共生型農業の概念自体が浸透しているのかもしれない。事務所の現状の課題としては、有機肥料の大量かつスピーディな生産であり、その点では高倉式コンポストが最適だ、と言っていた。どの程度の検証があってその情報に傾聴しているのか定かではなかったので、私はすでに高倉式コンポストが導入されているステーションへの見学訪問をそれとなく提案した。

3 日間を通して他に興味深かったこと

2 日目には上司の所有する水田での稲刈りを手伝うことができた。最寄り空港から任地までの車内で収穫作業があることを聞いたので手伝うよと伝えると大変喜んでくれた。

いざ水田に行くと、土地の持ち主である上司と同僚は水田には入らず、作業をする人々は別に雇われた人たちだった。mano garab (英語で rice harvester の意) と呼ばれる人々で、農作業を手伝う人々だった。彼らは農作業をし、昼ご飯と給料をもらう。英語の farmer はこの人たちを示す。現在の地主と労働者の関係は長い土地制度の歴史と関係がありそうである。

連日の雨と強風で地面はぬかるみ、穂先は地面にべったり倒れていた。これは在来品種で、背丈も低い。田に直播された稲を専用の鎌で刈り取る。私は農家出身のカウンターパートにその使い方と刈り取りの仕方を教わった。

この、私が水田の中で実際に収穫をするという行為は現地の人々にはいささか予想外だったらしく、町長に挨拶訪問をした際も上司はその話を喜んでしていた。

また、同地域には JICA の他に韓国 (KOICA) やドイツ (giz) による支援も入っており、今後何らかの連携が期待される。パーマカルチャーやネイティブチキンに関するプロジェクトが進行中で、行政はまさにこの地の利を生かして持続的な農業に移行しようとしやかりきになっている様子だ。財源もそれなりにあるように見受けられる。



刈り取りの仕方を教えてくれている C/P (上) と、働く農民 (下)

今後の予定

- 語学訓練

11/3-21 の日程で現地語の語学訓練がある。私の任地では **Karaya** 語という、西ヴィサヤ地方の中でも **Antique** 州で広く使われている言語だ。実際に今回 3 日間滞在してみたが、町役場の同僚たちがなんとか英語を話そうとしてくれるだけで、他の人たちは聞いてほんの幾分理解してくれるものの、話そうとはほとんどしなかった。この傾向は英語だけでなくフィリピン語と言われるタガログ語においても同様である。英語以上に耳に親しんでいることは確かだが、あまり話そうとしない。同じコミュニティの人間として扱ってもらうためには共通言語の取得が必須だと強く感じた。

- 地域の観察と現地情報の収集

町役場が所有している二次的資料を活用し、地域の歴史や土地利用、栽培作物、進行する開発プロジェクトに関する情報を収集し、より立体的に地域を見たい。また、資料の収集を通して米の在来品種を栽培している原住民、農家、地主などのキーインフォーマントを見つける。

- 訪ねられた、高倉式コンポスト、ボカシ、木酢液についての学習

- 「Local Knowledge and Agricultural Decision Making in the Philippines」を読み進める

- 地域に溶け込む